

存在と反省

——ガブリエルによるヘーゲル批判へのメタクリティーク——

大河内 泰樹

はじめに

マルクス・ガブリエルの哲学がもたらしたインパクトは多岐にわたるものであるが、その中のすくなくともひとつはドイツ観念論をふたたびアクチュアルな現代哲学の議論の中に復活させたことであろう。たしかに、プラグマティズムとむすびついた分析哲学において、九十年代以降ヘーゲルの再評価は進められていた。しかし、それが『精神現象学』の一部の読解を拡張していくものにすぎなかったのにたいして¹、ガブリエルのドイツ観念論についての見識はそうした一面的なヘーゲルの再評価とは比べものにならないほどの広さと深さを持っている。なによりも、それまで観念的・神秘的なものと理解されていた後期シェリングの重要性をわたしたちに気づかせた点において大きな貢献をなしたと言っていだろう。

ガブリエルのドイツ観念論理解は、プラグマティズムのそれとは解釈の哲学的文脈が全く異なっているとはいえ、カントが切り開いた地平において生じた哲学的問題を解決しようとすることでドイツ観念論が発展させられたと理解するという一点においては、分析哲学におけるヘーゲル再評価と軌を一にする。しかし、そこでヘーゲルが与えた解答には大きな欠点がありこれを克服したのが後期シェリングであるというのが彼の立場である。

それにたいし本稿では、後期シェリングに彼が優位を認め、ヘーゲルを批判する論点に関して、ヘーゲルの議論がすでにその論点を取り込んでいたことを明らかにする。ガブリエルの多元的存在論の立場は、後期シェリングと必ずしも同一であるわけではなく、最近になるほどガブリエルはシェリングとは違う方向にこの議論を発展させているように思われるが、むしろこの発展の方向性においてガブリエルはむしろヘーゲルに近づかなければならないと筆者は考えている。ただし以下ではこの点について十分に論じることはできず、検討中の方向性を提示するにとどまらざるを得ない。

1. 「世界は存在しない」

「世界は存在しない」という、センセーショナルな彼のテーゼから出発しよう。このテーゼの根拠となっている議論は、それ自体としては決して真新しいものではない。それ

は、ガブリエル自身も引いているようにヴィトゲンシュタインが『論考』において世界を見る目の不可視性について、ハイデガーが『存在と時間』においてつねに退隠していく「地平」について、そしてカントが『純粹理性批判』において「私」の認識不可能性について²述べていた際に議論していたことと基本的には同じ主張である。ヴィトゲンシュタインを例にとろう。私は世界の中にあるものを見ており、文はそこに成立している事態 (Sachverhalt) を写し取る。私が目にしているものは世界の中にあるが、私の目は私がその中にあるものを見ていない世界の中にはない。私は私の目自体を見ることは出来ない。たとえ鏡で自分の目を見たとしてもそれは見ている目ではなく見られている目である。見ている目は見られている目の前提をなしているが見ている目自体を見ることは出来ないのである。この比喻において、私の視界の限界は同時に世界の限界である。その限りにおいて私の目はこの世界と、その中にある存在の条件となっているが、この世界の中にはない。

カントはまさに同様の事態を、「わたしたちがそのまわりを常に輪を描いてぐるぐる回るしかないx」(KrV A346/B404)と表現した。カントの超越論哲学において、存在するとは、主観の受容性の能力である空間と時間の中に定立 (Position) されていることに他ならない。この空間・時間の中にある表象を統一し、客観的な認識であることを可能にしているのは超越論的統覚としての「私」である。この現象としての存在の根拠となっている超越論的統覚としての私を認識対象とし、これにカテゴリーを適用することは出来ず、その限りで存在すると言うこともできない。なぜならそのときにそれが存在するといわれているとしても、そこで存在しているのは、主観としての私ではなく客観としての私なのだからである。まさにこの認識そのものが主観としての私を前提しているのである。そこでまたこの主観としての私を認識しようとしても、同様に私は主観としての私を対象にすることはできない。わたしたちは、「そのまわりをぐるぐる回る」しかないのである³。

カントのこのパラロギスムス論における自我の認識不可能性とならんで、アンチノミー論においては〈全体としての世界〉の認識不可能性が主張される⁴。認識主観が経験することが出来るのは、特定の時間的空間的幅の中で世界の中に存在しているものであって、その全体を認識することは出来ない。時間と空間が全体として与えられることは決してないし、ましてや世界そのものがそっくり主観に与えられることはないのである。

厳密に言えば「世界は存在しない」のではない。世界は「存在している」とも「存在していない」とも言えないのである。なぜならわたしたちが「～は存在する」ということが出来るのは⁵、世界の中に存在しているものについてでしかないからである。もし私が「この世界は存在している」ということができるのだとしたら、わたしたちはこの世界 (世界 1) を包摂している世界 (世界 2) を地平としてこの世界について語っているのである。これが無限後退をきたすことは言うまでもないだろう。ガブリエルは、ここでその存在について語る事の出来るような世界を世界とは呼ばず「領域」(MML)あるいは「意義の場」(Warum/SE) とよび、それ以上その外にわたしたちが立つことの出来ないすべての

「意義の場」を包摂する領域を「世界」と定義する。したがって「意義の場」は「世界」において存在するが、「世界は存在しない」あるいは「世界は存在しているとも存在していないとも言えない」のである。

2. 多元的存在論

もちろんガブリエルの実在論の立場からは、上記のようにとくにカントに依拠しながら認識論的に、あるいは認識主観との関係から存在を理解することは間違いであるといわれることだろう。しかし彼は、存在に対する超越論的な問題構成を顛倒し、むしろ存在論を認識論に先行させその結果として認識論が陥っていた超越論地平の問題を世界の問題のなかに置き換えているのである。

このかぎりでは、ガブリエルの議論の新しさは「世界は存在しない」というテーゼにあるわけではない。むしろ新しさは、意義の場の中に現れるもの——たとえそれがフィクションの登場人物（シャーロック・ホームズ）や空想上の動物（一角獣）であれ——は実在的であると主張したこと（実在論）、さらに何らかのその中にあるものを実在的なものとするような意義の場は多数存在すると主張した点にある（多元論）。

ガブリエルがこれによって標的としているのは、現代分析哲学において主流の（科学主義的な）自然主義である。後者が、存在論を物理学に還元し、物理学的に確認されるもの（たとえば空間と時間の中に特定の位置を占めているもの——量子力学の限りではそうではないが）のみを実在的とみとめるのにたいし、ガブリエルはそうではない存在者の実在性も認める。何が実在するのかは、その意義の場から理解される。物理学において原子が存在するように、『シャーロック・ホームズ』においては、シャーロック・ホームズは実在的であるし、数学においては π は存在する⁶。その限りにおいて、実在性を唯一物理的対象のみに帰する自然主義は間違いであることになる⁷。

ジジエクとの共著『神話・狂気・哄笑』に収録された「反省という神話的存在」においては、これらの領域（意義の場）と領域（意義の場）とは共約不可能であるとされていた。つまり、領域と領域には、共通の基盤もなければそれらを測る共通の基準もなく、相互に比較することも出来なければ、どちらが正しい、あるいはどちらがよりよいのかも判断することが出来ない。領域の選択は恣意的にならざるを得ないのである。したがって、それぞれの意義の場は、（科学も含めて）どれもが「神話」である。合理性、ないし論理はその領域の中でしか通用しない。合理性ないし必然性は、恣意性ないし偶然性に依拠しているのである。ガブリエルはそこで自分の仕事を「神話学の神話学」とよんでいた。それはつまり神話の間の関係を問題にする営みもまた神話であらざるを得ないということである。そしてそれは、新たな（すべての神話を包摂する）神話を打ち立てるのではなく、ただ「全領域の領域のとらえがたさ」、言いかえれば「世界が存在しないこと」を指摘するという控えめな課題を果たすことしか出来ないとされる（MML 74-75/143頁）。

しかし、こうした「神話学の神話学」という構想をガブリエルはその後維持できなくなったように思われる。『意義と存在』においても、同様に領域（意義の場）の複数性の主張は維持されているが、それには存在論のひとつのバージョンとして哲学的説明が与えられている。同時に前者においてはメイヤスの「偶然性の必然性」という概念に対抗して打ち出されていた「必然性の偶然性」をめぐる様相論がより体系的な仕方でも展開されている（SE §§9-10）。ここにガブリエルにおける神話から哲学への転回を見ることができよう。

3. 反省の不完全性

「反省という神話的存在」において、「神話学の神話学」の構想は、ヘーゲルの「反省」論理を批判することを通じて正当化されている。ガブリエルは、ヘーゲルがこの反省論理によって、「存在」を論理的媒介の側に回収し、それによって措定されるものとして根拠づけようとしたこと、またそうして本質を仮象の外にあるものとしてではなく、仮象を本質と一体のものとして理解しようとしたことを正しく理解している。しかし彼は、シェリングの「思考以前の存在 *unvordenkliches Sein*」という概念に依拠しながら、このヘーゲルの反省自体が、無媒介な存在を前提とし、結局は神話に依拠していると主張する。

筆者は、このガブリエルの反省論理解にはふたつの問題があると考えている⁸。まず第一に——これはむしろ結果的にガブリエルに好都合となるかもしれない点であるが——、彼がこのヘーゲルの反省論理を主観性理論として理解し、ヘーゲルがこれを論理学、しかも客観的論理学において展開していることを無視している点である。第二に、反省と呼ばれるこの客観的自己言及構造をヘーゲルは、ガブリエル自身が世界の認識可能性を導出する、メレオロジー的構造から生じる無限後退の問題にたいする解答として提出していることを見逃しているということである。ガブリエルは全体に自己言及構造を認めることによる矛盾を回避するために世界が存在しないと主張することになったわけだが、ヘーゲルはまさにこの自己言及構造そのものを主題化しているのである。

以下では簡単にこのふたつの点について確認していきたい。

ひとつは目ヘーゲルの反省論理の位置づけから明らかである。反省論理は、とくに『大論理学』第二巻「本質論」冒頭の第一篇第一章「仮象」において展開されており（GW 11, 244ff.）、有論も本質論も客観的論理学に属する。そこでは、これに先立つ「有論」の「存在」にたいして、本質が導出されている。本質は「存在の否定である」という規定を持つものであるというのが本質論の出発点である。それにたいし、そうして否定される存在は「仮象」と呼ばれることになる。この論理の理解の鍵となるのは、この存在の否定としての本質の概念についてのヘーゲルのラディカルな理解である。通常、或るものが他の或るものの否定であるとしたら、前者は後者とは別のもの、「他のもの *das Andere*」であることになる。しかし、この「或るもの *Etwas*」と「他のもの *das Andere*」との関係は、

まさに有論における存在の典型的なあり方として「定在」章において展開されていたものであった。したがって、本質が存在を否定するものであるということは、本質と仮象との関係はこうした「或るもの」と「他のもの」との関係とは異なったものでなければならないことになる。

したがってヘーゲルの考えでは、存在の外に本質があるとき、本質は本質となることは出来ない。こうした本質は、それが否定する存在を自分の中に包摂していなければならないことになる。つまり存在と本質は部分と全体とのメレオロジー的関係において理解されているのである。

しかし本質は、今や仮象となった存在を否定してのみ本質であり、仮象は本質によって否定されることによってのみ仮象である。統一としての本質は、非統一としての仮象に対立してしまう。本質は仮象の他者である。このいまだ自己言及的になっていない外的関係における本質と仮象を、ヘーゲルはとくに「本質的なもの」と「非本質的なもの」とよび、本来の本質と仮象から区別する(GW 11, 244ff.)。

ヘーゲルがこのような「本質的なもの」と「非本質的なもの」という概念を導出するのは、本質と仮象との関係は「或るもの」と「他のもの」の関係として捉えられてはならず、またさらに仮象を包摂すべき本質という概念には無限後退という問題がまわりついていることを指摘するためである。つまり本質が本質と存在の統一であるとしても、この統一が両者の区別とは別のもの（「他のもの」）として理解されているのだとしたら、本質はふたたび自分の外に「非本質的なもの」を持つ「本質的なもの」であるにすぎないことになる。本質的なものが本質となり、非本質的なものが仮象となることが出来るのは、この本質と仮象が一体となった、「自分自身と関係する否定」としての、つまり自己言及的否定作用としての反省においてである。

ヘーゲルがここで「反省」という概念を必要とするのは、「本質的なもの」と「非本質的なもの」によって示されていた上記の問題を解決するためである。これは、通常そう理解されるように、認識主観が自己を対象化することではない。ヘーゲルはこの概念をあくまで存在論的問題構成の中から導出している。そして、本質は、それが本来そうであるべきものであるならば、「自分自身と関係する否定性」というものでなければならない。これをヘーゲルは「反省 Reflexion」と呼ぶのである(GW 11, 249f.)。

したがって、ヘーゲルの反省概念は、本質と仮象の関係を全体と部分の関係とする独特な理解から要求されるものである。しかしまた他方で、それは、全体が部分を否定することによって、同時に自分自身を否定するというねじれたメレオロジー構造である。

つまり、部分を存在させている全体は、同時に全体自身を存在させている。これは循環であるが、まさにカントがパラロギスムス批判において循環を不都合と述べたことについて、ヘーゲルは、循環は不都合ではなく、むしろ「自己意識と概念の永遠の絶対的本性」(GW 12, 194; cf. 大河内 2003)であるとしていた。言いかえれば、カントが「そのまわりをぐるぐる回」っていたxが本質なのではなく、むしろ、「ぐるぐる回ること」それ自体

が本質なのである。

ヘーゲルが、こうした自己言及性の構造をカント、フィヒテの主観性の理論からとりだしてきたのは間違いない。しかし、その結果明らかとなるのは、自己言及性の構造の方がむしろ自己意識を成り立たせていたのだということである。しかし存在の順序は認識の順序と異なる⁹。論理学の反省は、論理として取り出され、狭義の自己意識はそこから理解されることになる。したがって、反省論理を主観性の理論として理解するガブリエルの解釈は、ヘーゲルの反省論理を非常に狭く捉えたものであるといわざるを得ないだろう。そしてヘーゲルの反省が同時に、ガブリエルの議論が前提している、直接性をあらかじめ自己のうちに取り込んだあり方をしたものとして構想されているのを見落としているのである。

4. 認識論的多元主義の修正

『意義と存在』においてガブリエルは、カントの超越論哲学は、存在論的ニヒリズム¹⁰に陥るのでなければ存在論的多元論を認めなければならないと述べている(SE 123)。カント自身は、存在論的一元論を支持しており、つまり現象という領域においてしか存在について語ることは出来ないと考えていたが、まさにその条件について語る際に別の「意義の場」を用意しているというものである。つまり超越論的領域である。しかし、カントにとって超越論的領域と現象の領域の関係は並列的な関係ではない。前者は後者を基礎付けており、前者はそれ以上の基礎付けを必要としないことの論証は、「アприオリな総合判断」の可能性の論証が担っている。

ヘーゲルのカント批判もまた、この認識の認識というメタ審級を認識の外に置こうとする点を批判するものであった。それはヘーゲルにおいて、別の「意義の場」としてではなく、認識として地続きのものとして理解され、むしろこの点においては一元論であり、ガブリエルが正しければそれは存在論的ニヒリズムを帰結するように思われる¹¹。

自然主義批判においてよくとられる戦略は、物理学を中心とした科学の妥当性を認めながらも、その妥当領域を制限し、科学によっては説明できない領域が並列して存在することを示すことである。この戦略は確かに自然主義に対する批判となりうるものであるが、人間の知を総体として捉えることを不可能とする。

ガブリエルは「知は統一され得ない」(SE 36)として、むしろこの点を積極的に主張している。しかし、わたしたちの認識あるいは知識に、何らかの序列化や進歩は存在しないだろうか。そうしたものがあるとすれば、それをはかる可能な基準のひとつは「脱中心化」であるように思われる。周知のように脱中心化は、発達心理学において幼児の認識能力の発達を説明するために用いられてきた概念である。この理論が示しているのは、少なくともわたしたちの認識は自己中心的なパースペクティヴから出発し、のちに脱中心化した視点を獲得するということである。この脱中心化のプロセスは発達心理学においてのみ

見られるものではない。たとえば地動説から天動説への(本来の)コペルニクスの転回も、この脱中心化のはたらきとして理解することが出来るだろう¹²。幾何学が測量技術から独立したこと¹³、さらにユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何学への発展も脱中心化として理解することが出来るし、また相対性理論は古典物理学を包摂するより包括的な理論だという理解も存在する。『精神現象学』はその全体がこの脱中心化のプロセスのジグザグの道であったといってもよいだろう¹⁴。

ヘーゲルの論理学においても、有—本質—概念という系列は、この脱中心化のプロセスとみることが出来る。有論における直接性から出発する立場から、本質論においては媒介がこれに先行することが(あとから)示される。上記の反省論理はまさに、この本質論の冒頭に成立していた。概念論は、この媒介の先行性の立場から、認識の順序ではなく、存在の順序にしたがって、それまでの成果を再記述したものである¹⁵。したがって概念は、ヘーゲルにとって世界の中の個別的存在者の対応物ではないし、判断は世界の事態に対応する命題でもなければ、推理も世界の構造そのものを写し取っているわけではない。概念は、自己関係的なはたらきとして、むしろそうした機能を概念の特殊なあり方として含み込んでいる。したがって、概念は先行する有や本質の否定ではあるが、その否定された当のものがその中に位置づけられている。これはメタ理論ではない。全体であることはメタ理論であることとは別のことである¹⁶。認識は直接性から媒介へと発達するかもしれないが、実際には媒介が先行し、発展を通じてそこから直接性(客観性)が生じてきたのである。こうした存在の順序からの捉え直しはそれ自体が、脱中心化のプロセスに属する。

ヘーゲルにとって哲学は体系でなければならなかった。それは一方で認識論的一元論を擁護するものであるように思われるが、他方でそこで体系によって結合されているのは、複数の「哲学的学(=知 Wissenschaften)」である。ヘーゲルはそれぞれの学が、あるいはその個別領域が独立した原理によって成り立っていることを認めている。しかしそれは序列化され、相互に移行し合う関係にある。ヘーゲルの体系は、その全体がそうした脱中心化のプロセスの複雑な序列化によって成り立っているといってもいいだろう。それは、ガブリエルの多元的存在論+多元的認識論が、神話から手を切り哲学へと向かったときに帰結すべきことではなかったであろうか。

略号

GW: *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Gesammelte Werke*. In Verbindung mit der deutschen Forschungsgemeinschaft, herausgegeben von der Rheinisch-Westfälischen (später: Nordrhein-Westfälischen) Akademie der Wissenschaften, Hamburg, 1968ff

KrV: Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Hamburg, 1971.

MML: Markus Gabriel/Slavoj Žižek, *Mythology, Madness, and Laughter. Subjectivity in*

German Idealism, London/New York: Continuum. (マルクス・ガブリエル／スラヴォイ・ジジエク『神話・狂気・哄笑——ドイツ観念論における主体性』大河内泰樹・斎藤幸平監訳、堀之内出版)

SE: Markus Gabriel, *Sinn und Existenz. Eine realistische Ontologie*, Berlin, 2016.

Warum: Gabriel, Markus. (2013=2018). *Warum es die Welt nicht gibt*, Berlin. (マルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』清水一浩訳、講談社)

参考文献

Brandom, Robert (2002) 'Heidegger's Categories in Sein und Zeit', *Tales of Mighty Dead. Historical Essays in the Metaphysics of Intentionality*, Cambridge, Mass./London: Harvard University Press

Gabriel, Markus (2013) *Transcendental Ontology: Essays in German Idealism*, London/New York: Bloomsbury Academic, 2013.

Okochi, Taiju (2008) *Ontologie und Reflexionsbestimmungen. Zur Genealogie der Wesenslogik Hegels*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2008

大河内泰樹「魂(Seele)から精神(Geist)へーヘーゲル論理学における形而上学的心理学批判」、岩佐茂・島崎隆編『精神の哲学者ヘーゲル』創風社、2003年、pp. 122-144.

大河内泰樹(2014)「規範・欲望・承認ーピピン、マクダウェル、ブランダムによるヘーゲル『精神現象学』「自己意識章」の規範的解釈」、唯物論研究協会編『唯物論研究年誌』第19号、2014年。

大河内泰樹(2017)「プラグマティズム・自然主義・ヘーゲル」『哲学の探求』第44号、2017年。

大河内泰樹(2019)「多元的存在論の体系——ノン・スタンダード存在論としてのヘーゲル『エンチクロペディ』」『思想』第1137号、2019年。

フッサール、エトムント／デリダ、ジャック(2014)『幾何学の起源』田島節夫他訳、青土社。

永井均『翔太と猫のインサイトの夏休み——哲学的諸問題への誘い』(ちくま学芸文庫、2007年。

註

¹ その一部については以下で整理したことがある(大河内 2014)。筆者はそうしたプラグマティズム的なヘーゲル主義の主張にコミットしてきたし、今でもコミットしている

(大河内 2017)。ガブリエルは、たびたびこうしたプラグマティズム的ヘーゲル主義を批判しているが、彼の多元的存在論にはむしろプラグマティズムから一定の修正が加えられなければならないと考えている (大河内 2018)。

- 2 あるいはこれを永井均が「水槽の中の脳」の指示不可能性について指摘していたことと比較してもよいだろう (永井 2007)
- 3 この点については Gabriel 2013, xv-xvii も参照。
- 4 カントの「世界」概念についてのガブリエルの解釈については SE §2a で展開されているが、ここでは詳述できない。
- 5 ガブリエルは「存在は実在的述語ではない」というカントのテーゼを批判し、「存在 Existenz」ないし「～は存在する...existiert」は意義の場の性質であると主張する (SE 96) がこれは大変奇妙な主張である。個物との関係において、「意義の場」はそれを「存在させる」という性質は持ち得るのだとしても、それ自身「存在する」わけではない。
- 6 厳密には π が存在するか否かは、それが数学におけるどの意義の場に置かれているのかによるだろう。
- 7 この場合否定されているのは物理学において物理的対象が存在することではない。自然主義は、ここであらゆる意義の場において、物理的対象しか存在しない、あるいは物理的な意義の場がすなわち世界 (ガブリエルは物理的対象の全体を世界と区別して宇宙 *Universum* と呼ぶ) であると主張する哲学的な立場である。
- 8 筆者の反省論理解釈については、Okochi 2008.
- 9 認識論批判としての『精神現象学』と体系とのあいだの関係も同様に理解することができよう。
- 10 ガブリエルは存在論的ニヒリズムを「何かがある中に存在する場がない」という主張と理解している (SE 123)。
- 11 こうした理解が誤りであり、ヘーゲルのエンチュクロペディ体系はむしろ多元的存在論の構想として理解すべきであることを私は以下の拙稿で論じた (大河内 2018)。
- 12 ひとつの宇宙としての「ユニバース」から「マルチバース理論」への展開もまた、こうした脱中心化のプロセスのひとつとして理解することができよう。これについてはガブリエルの来日の際に東京大学国際高等研究所カヴリ数物連携宇宙研究機構主催で 2018 年 6 月 10 日に日本科学未来館で行われた講演と合わせて行われた野村泰紀氏の講演「我々の宇宙を超えて」より示唆を受けた。
- 13 このことは、もちろんフッサールの『幾何学の起源』にたいするデリダの批判の再検討を必要とする (フッサール/デリダ 2014)。
- 14 さらに、ブランダムが、その著者の意図を歪める形で『存在と時間』の「主題化」の

新実在論の可能性

議論をむしろ積極的な発展と理解する解釈を行ったことがここで思い出されよう。プラグマティックな道具的な連関における自己中心的な視点から、対象を中性化する客観的な視点の獲得は、むしろ前進として理解されるのである(Brandom 2002)。

- 15 この点をここで詳細に展開することはできないが、このことは客観的論理学が認識論であることを意味するわけではない。
- 16 こうした主張はトリビアルに聴こえるかもしれないが自明ではない。この点においてもガブリエルのヘーゲル理解は誤っている(Gabriel 2011 xxi)。